

講 演

大 御 心

芳 賀 矢 一

一昨日は教育勅語煥發三十年の祝賀紀念會といふことが行はれました。今日は又明治神宮の鎮座式といふやうなことでございまして、旁々明治天皇を偲び奉るのに色々重いことの多い折柄でありまして、其際に明治聖徳記念學會の講演を御催しになることは至極適當なこと、考へますのであります。就ては私に何か一場の話をせよといふことであります、實は私非常に公私多忙でありまして、此學會に出で研究いたしましたものを格別皆様の前に御話するといふ程の材料も持ちませぬので、洵に御申譯ないこととであります、皆様の既に御承知のやうなことを唯々私の意見として御聴きに入れて今日の責を塞がうと思ふのであります。

私は大御心といふ演題を掲げて置きましたが、大御心といふことは固より御承知の通り天子様の御心

持を申上げたのであります。「大」といふ言葉も敬語であります。「御」といふ言葉も敬語であります。敬語を二つ重ねまして大御心といふのであります。日本語は既に元來非常に敬語に富んだ國語であります。日本國民は敬語といふものを澤山使ふ國民であります。御互に語を致しますのにも非常に敬語があります。是は申すまでもなく外國などには、殆ど類の無いことでありますが、名詞、代名詞、形容詞副詞、動詞總てに敬語を使つてあります。又昔の國語から今日の俗語まで、この吾々の敬語といふものは十分に色々時代に依て變つては參りましたが、始終敬語は澤山ある。唯今私が御話いたして居ります言葉でもやはり幾分敬語を使つて居るのであります。是が御互同士、友達同士話をする時になれば、もう少し敬語を省いた形でも話しますし、更に一層敬語を用ゐて話しますこともあります。敬語といふものは澤山ありまして、西洋人が日本語を學んでも一番困るのは敬語のことです。吾々は既に生れながら習ひし言葉でありますから不自由は感じませぬけれども、日本語の稽古には外國人は困るさうであります。是は併ながら日本の國體並に社會状態から出て來たことであります。我國に於ては初めから君臣の分定つて居つて天皇は神様と同じ位置と思ふのは上代からの精神であります。隨て天皇に對する言葉といふものは自ら普通の人に對する言葉とは初めから違つて居つた。それであるから何方かへ御出になることを「みゆき」といひ、吾々の家は普通は「や」であります。それに「み」の字を附けて「みや」といひ、吾々の子供は「こ」であるけれども、それに「み」をつけて「みこ」といふ。斯う

いふやうに昔から天皇に對する特別の敬語といふものを有つて居つたのであります。で御覽になることを「みそなはず」といひ、さう御考へになることを「おぼしめす」といふやうに別々になつて居りまして特別に動詞もあるやうな譯で、それから「あらせられる」「あそばす」といふやうな種々の敬語も後には澤山出て來たのであります。それは初めは特に天皇とか皇族とかいふ方の最も貴い方に用ゐて來たのであります。段々後には低い所まで用ゐるやうになりましたけれども、根本の日本の國語に於ての敬語は外國などにはない一種の敬語——崇敬語といふものが發達して來て居るのであらうと思ひます。又君臣の分ばかりでなくして日本の家族制度といふものは、所謂祖先崇拜の風が根本になつて居ります。皇室に對する考も、皇室の御祖先を御尊びになる御精神もそれでありましたが、吾々が親を尊び祖先を尊ぶといふことも、即ち家族本位の社會でありますから、家の頭、家長といふ者を尊びまして、親に對する言葉、親が子に對する敬語は矢張其處に分別がある。親より兄なりに對する言葉は弟なり姪なり子供に對する言葉と區別がある。爰に於て敬語——崇敬語といふものが出來て來たのであります。諸外國に無類の敬語が、我國に存して居つたといふことは、建國以來、家族制度と國體とに此言葉が存して來たのであります。それに依て大御心といふのは大きな立派な御心といふ意味であります。天子様の御心を大御心といつて普通の人の吾々の言葉に大といふ字と御といふ字とを附加へるのは大變尊敬し奉つた言葉であります。吾々の普通の人の考へるのは心であるけれども、天皇の御考へになることは大御心といふ。

扱此大御心といふものは即ち天子様の御心でありますが、是が一人々々の天子様の御心といふことにも勿論應用されます。唯今の陛下の御心も大御心、唯今の陛下の思召は陛下の大御心であります。併ながら此大御心といふことは今少し廣くどの天子様でも、天子様のどなたといふ方に限らず廣く、言換へて見れば帝王の心とでも申しませうか、さういふ風に日本では昔から使つて居るやうに考へられるのであります。即ち天子様の御考へになることは吾々人民の考へることゝは別な點がある、天子様の御心といふものは一種別な御心持がある、それで大御心といへばどういふことかとといふことが既に分るやうな風に、日本人は昔から分つて居つたやうな風に思ふのであります。どういふことかと申しますれば即ち民を愍み國の榮えるやうにすることに骨を折る、祖宗の訓へを承けて、祖宗の遺訓を傳へて、さうして人民を愍んで行く、さうして國を益々榮えさせるやうにする、此の心持が大御心であるのであります。さういふ御心持が歴代の天子様——列聖の大御心に繋がつて昔から今日まで傳はつて來て居るのであります。それを大御心といふのであると私は解釋して居るのであります。言換へて見ますれば近頃學校の教科書にも其他始終載つて居ることでありませんが、要するに天照大御神の神勅と申しますれば、天照大御神の御心持——我皇祖の御心持がすつと今日まで傳はつて來た、傳はつて來てそれが大御心といふものとなつて始終發現して來る。日本の歴史を御覽になれば御分りになる通り、昔からの歴史を見ますといふと、色々の天皇——列聖が人民の爲めに種々恵みを垂れさせられた、仁慈の恵みを垂れさせら

れたことが、斷片のものではない始終繋がつて來たのであります。仁徳帝の民の竈のことも、醍醐天皇の寒夜に御衣を脱せられたことも、決して斷片のことではない。偶々さういふ天子様が出たと思つたならば間違であつて、それは日本の天子様の大御心の連續である。歴代の天皇と御なりになつた方は皆大御心を以て國を治めることを第一として御考へになつたのであります。歴代の御心は少しも動かながつたのであつて、それが或は仁徳天皇或は醍醐天皇の民の竈、寒夜の御衣の話が傳はつたのであります。如何なる世にも此様なることは疑ひがない。聖徳太子の憲法にしてもさうであります。今日以後に聖徳太子の御話が黒板博士からあるさうであります、聖徳太子が新しい支那から來た文化を日本に採つた、國家の文運を進めて日本の國を早く所謂優等國にしようといふ御考から、支那文明、盛んに佛教を御入れになつたのも日本の文化を開くといふことが主であつたこと、考へるのであります。動もすれば後世の人に餘りに佛法に御走りになつたといふことで忌避する人がありますけれども、聖徳太子の御考は日本の文化を開くといふ御考であつた。又それから後に奈良朝になりまして大變佛法が盛んになつて參りました、それが爲に色々の事が盛んになつた結果、結局弓削道鏡などが帝位を覬覦するといふことが起つて參りましたが、あの時代に聖武天皇が奈良の大佛を御造りになり諸國に國分寺を御置きになるといふ場合に於きましても、結局日本の國を治める、國家鎮護といふ意味で佛法を頻りに御講究になつた。桓武天皇などにしても東寺を國家鎮護の道場として御建てになつた、佛法を興隆なすつ

た天子様も國家鎮護人民法樂といふ爲に政の一端としてなされたことは其一斑であります、さういふことを歴代見て參られた日本の國の天子様には、いろいろ御著述がある。即ち昔から日本の列聖には御書きになつたものがありますが、諸國の帝王にあれだけの色々のものを書いた者は何處にもそんなにないのであります、日本では今日まで遺つて居ります書物が二百八十種でありましたか六十種でありましたか多數の著述が列聖文集として先年出版になりましたが、あれ程澤山に歴代の天皇は御著述があります、其御著述の昔の有職制度を御調べになつたもの、或は日本文學のこと、其等或は其御日記等を見ますれば何れも民の心を以て心とし、人民を愍み國家を盛んにするといふことを始終心掛けさせられて居られたといふ大御心が始終窺はれるのであります。又御著述でなくても近來段々御手紙であるとか何とか、是まで段々隠れて居つたものが史料の搜索に於て現れて居ります。其等に於ても大抵人民を愍むといふ大御心が窺はれるのであります。斯ういふ一貫した天皇の御心持即ち大御心といふものが神代から今日まで變らずに繼續されて居る、萬世一系は其處にあるのであります。萬世一系は御血筋が續いて居るので萬世一系で、最もそれが貴いのであります、萬世一系の原因は何處にあるかといふと、其大御心が萬世一系と繋がつて居つて人民に臨ませられて居るといふ、それが非常に日本の貴い所であります。此頃青木某と云ふがある雜誌に萬世一系を疑つた論を書いたさうであります、萬世一系といふものは、此日本の國の建國の精神で、それを疑ふのでは既に日本の憲法から疑ふのでありますけれども、其事は

此日本の國が大御心が連續して今日まで來て居るといふことを知らぬ、詰りやはり日本の歴史を知らぬから分らぬのであらうと思ふのであります。此大御心が連續して來て居つて萬世何時までも變らずに居る、即ち如何なる場合、何時の世にも國民對皇室といふものに於て争ひの起つたことは決してないのであります。中に關白が出來て來て權を振るゝか、或は將軍が出來て來て兵馬の權を篡ふとかいふことがあつても、是は權臣が權を竊んだのでありまして、一般の人民を愛撫する大御心は何時も變らぬのであります。又人民が皇室に對して神様として尊敬するといふことは昔から變つたことはないので、皇室對人民の争ひと云ふものをなされたことは無いのであります。此の大御心の一貫して居るのが萬世一系の貴い所以であります。それでありまして吾々は天皇様に對しては如何なる天子様も同じやうな尊敬心を有つて居る、歴代に於て此方は立派な御徳があつた、神武天皇はお偉い、天智天皇はお偉い、仁徳天皇はお偉いといふことから特に其天皇をお偉いといふことはないので、此萬世一系といふ續いた所を吾々は有難く思ふのであります。それですつと其連續して來た大御心を段々御繼ぎになり御繼ぎになつて、さうしておめでになる所が所謂天津日嗣を知ろしめす皇孫であるのである。是は極上代を申しますれば天照大御神にまで參るのであります。吾々の古典と申します古事記並に日本紀等に現れて居ります所を御覽になりますれば、直に其昔からのことが分るのであります。古事記とか日本紀とかいふものは所謂神話ミソロジといふ、色々日本の古傳説を含んだものでありまして、純粹の歴史ではない、あれ

を純粹の歴史として説けば了解が出来ぬ。神話が混つて居ると認めなければ天照大御神を太陽の神、日の神と説いた所が今日の人は承知をしない。併しあれ等を見ると日本人の元の思想が其處に現れて居るのであります。我日本國に於ては元來農業を以て國を建て、居るのでありますから、此農業國に於ては太陽ほど有難いものはない。秋になれば食物が實る、太陽が出なければ段々食物が得られない、此有難い太陽の恩徳といふものは是は何處の國でも感ずるので太陽を中心としたものはありますが、日本の神話のやうに恣に温厚な温和な女神と現れて、さうして素戔嗚尊の随分暴れて亂暴をなすつた時でも御辛抱をなされて罪を御咎めもなく、最後に國を篡ふ考があるといふ時に至つて武裝をして御迎へになつた柔和な中にも憤然として立つといふ斯ういふ御態度がある、日本の特色であるのであります。さうして日本が太陽の恵みを誰でも受けるといふ、此有難い太陽と皇室とを結び付けて皇室の御祖先と一緒にしてしまつたのであります。皇室の御祖先が如何に太陽の如く有難いものであつたかといふことは之に由つても分る。即ち我古事記日本紀に現れた考は國民思想を現はしたものである。國民思想を現はしたものであるからして、あゝいふ面白い話となり歴史と神話と混つたものが出来たのであります。それが神代の卷であります。さうすると天照大御神と有難い太陽といふ農業の保護神と全く一つにしてしまつたのは、其處に國民が如何に我皇室に感謝して居つたかといふことが分る。吾々の祖先が如何に皇室に對して有難い恵みを感じて居つたかといふことが分る。それだけ感ずるといふことは太陽の恵みの如くや



はり皇室が國民に恩惠仁慈を下すつたことが分るのである。其御心を歴代の天皇が傳へ傳へて居らるゝが即ち大御心である。それであるから吾々は神武仁徳といふ後まで傳はつた方だけでなく、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝靈、何等の治績のない方々でも同じく大御心を御傳へになつた方々で、それで以て大体此國を御治め下すつた、大御心が萬世一系に傳はつて來たといふことを非常に有難いと感ずるのであります。それで外に對して萬世一系といふことを誇るのである。大御心が萬世一貫して居る、古今通じて居るといふことが貴いのであります。

扱神代より今申しましたやうな仁慈の政を傳へて御ゐて居りました所が、所謂聖徳太子以後宗教といふものが傳はつて來まして、さうして支那の教へが其處に這入つて來ました。支那の教へといふものは日本の國体とは矛盾するのであります。支那人の考といふものは要するに天子は天に代つて政を行ふものである、即ち人民の中で最も天の心を得たものである、優秀な徳のある者が即ち國を治めると斯ういふことになつて居る。そこで若し其徳のあるべき者が徳がなければ所謂陰陽和を失するとか、天變地異が起つて位を去らなければならぬ、さうして他の賢者が之に代つて天子になる、之を名づけて革命といふ。其革命の教へが日本に這入つて來たのであります。其時に朝廷ではさうであつたか、大御心の發動はさうであつたかといふと、それから後の所謂續日本紀の宣命などに澤山直に天子様の勅語として見えて居りますが、さういふ時代の天子様は人民に先立つて其事を直に御取入れになつた。日本の國

体から申しますれば天津日嗣の御裔は何時までも天皇として天照大御神の皇孫瓊々杵尊の御子孫が位臨御即きになるのに御遠慮はないのでありますが、併ながら位に御即きになつた時の宣命を讀み奉ると何時でも斯ういふことを御述べになつて居る。今自分は初めて天皇の位に即いたが、尚ほ心配でならない天地の心も知らぬ。天地の考はどうであらう、退くも知らず進むも知らず、進退をどうして宜いか恐懼に堪へない、尚ほ自分は出来るだけの力を尽して此國を幸福に人民を幸福にしたいから、どうか百官、天下の大御寶、天皇人民、上下合一してやらなければならぬといふ、さういふ宣命であります。是は何であるかといふと、全く支那思想が這入つて來た、支那の方で天地の心を失つてはならぬといふことが來て居ります。人民は何ともいはない、人民の方から一遍も言出したことはない、然るに朝廷の方では早く其説を容れられて、彌が上にも昔から有つて居る心といふものを始終發露して來たのであります。其支那の教へが傳はれば傳はると同時に直に支那の善い所だけを御採りなさるやうになつた。さうしてやはり昔からの仁慈の政をなされる、それだけで決して悪いことばはない、其上に御謙遜で徳教の源にならなければならぬ、皇孫は徳教の源であつて、さうして支那の政に徳を以て人を導く、是から仁義忠孝といふやうな教の模範とおなりになる、さうして仁義で導くといふことを御やりになつたのが聖徳太子以後であります。支那文明の輸入以後の御努力であつたと思ひます。是に於て大御心は古來の仁慈の政の上に更に支那の教へを加へ先んじて仁政を御施しになつたのである、さういふ風に大御心は

連續して參つて居るのであります。先刻申し上げました佛教の方のことも少しでも人民が宜くなるやうに佛教をお入れになつた、其大御心は時代に依て變りましても、何時も大御心の目的は人民國家といふことより外にないといふことは歴代の詔勅に明かに之を示して居るのであります。即ち理想的に君として洵に立派な仁君、所謂國の今の言葉で申しますれば統治者といひませうか、さういふ一國を治める方として理想的な立派な君がすつと續いて來たのが大御心の發動からして來たのであると思ふのであります。既に其處が決して外國に例のないことである、それが即ち萬世一系である、續いて來たのであることを考へますれば、明治天皇の如きは此歴代の御心の一つ御一身に御集めになつた方であつた、殊に大御心の大に發動して來たのが明治天皇の御一生に於て見得ると思ふのであります。此歴代、先刻申す通り歴代ごの天皇と申上げても皆吾々の崇敬する方である、一人々々のごの天皇が宜いとかいふのではない、すつと昔から大御心は人民を仁慈にして國家を隆盛にすることを目的とせられた、之を第一とし給ふのが皇尊といふことである。それと同じ様に考へますのであります、歴代皇室といふものは所謂文教の中心とも御なりになる名譽の中心であつたのであります、それが歴代續いて參りましたが、殊に此明治天皇の御代に於てそれが大に天皇の御一身に於て御發揮になつたかと思ふのであります。何れもむづかしい時があれば上下一致して心を一にして國難に當るといふことは折々發動して昔から見える。即ち元寇の役の如き、あの時分に朝廷と幕府即ち鎌倉とは自ら平和を缺いて居つた如くであるに拘らず、あ

の時分に協力一致して即ち龜山上皇御自ら身を以て國難に代らむと御祈になつたといふ御事蹟、又近代明治天皇の御維新といふ時代にも此上下心を一にして一致して事に當らうと考へられた、斯ういふやうなことで如何にも日本の國の危い時期になりますといふと、此大御心の發動とそれから國民の天皇に對する尊王心といふものが結び付いて、さうして國家の紛亂を何時の間にか排除して進んで来たといふのが我國の歴史ではないかと思ひます。日本では昔から神様即ち天皇と考へ君即ち國土といふ思想がありました。神是れ君である、君是れ國である、君是れ父であるといふ風に考へて居つた日本國民は、即ち國難に際してさういふ考を起して來て、上下一致國難を排除するに努めたといふことは今日までの歴史の光輝ある成蹟と考へて居るのであります。是が明治天皇の御代に最も著しく現れたことであります。是はもう殆んど歴代の最も美しい所を御集めになつて御出しになつたやうな天皇と恐れながら考へる次第であります。歴代の天皇が非常に優美風流文雅の道に御長じになつたことは、先刻申しました通りに日本の歴代の天子様が澤山の御著述があるに依つても御分りでありませう。此道に於て明治天皇は歌の御嗜みがあつて、それが唯一の平生の御慰みであつたといふことを考へますといふと、是は實に歴代の天皇の所謂みやびみやびといふ言葉は宮の美といふ心で朝廷を尊ぶ心から出て來たと思ひます。がみやび——といふことを一身に御集めになつた方である明治天皇の御歌は二十万首の多きに上つて居るといふことでありますが、殆んど常人の普通の歌讀みでもなか／＼眞似の出來ないことであります。

日本の歌人では、昔の歌人で藤原家隆が一番だといふことで、それが二万首しか詠んでない。其十倍の御歌を明治天皇は御作りになつたといふことは洵に優美、優雅な御氣質が現れて居ることでありすがさうして洵に敬神、神様を御敬ひになるといふとは、是はもう申すまでもなく歴代の所謂大御心の中に敬神の念は厚いのであります。明治天皇は段々承ります所、殆ど自ら神といふ御信念が堅かつたさうであります。自らは神であると思召されて其御心持を以て民に臨ませられたのである。それであるから固より外國にあるやうな君臣の争ひなどあるべきでない。此深い信念、自分は神であるといふ觀念を以て、色々な御逸話等が傳はつて居りますが、其等の美しいことはもう其信念から總て發して來たものと考へるのであります。それで明治の大政、大業といふものは全く此美しい歴代傳はつた大御心が明治天皇に傳はりまして、其明治天皇が國運の最もむづかしい時期に御遭遇になつて其大御心が發動したのが即ち明治時代の御鴻業の政である。即ち日本の國の歴史に於て斯ういふことがあつたといふことは洵に以て天祐のやうであります。併ながら是は日本の古代からの歴史を考へて見れば當然のやうに考へられます。明治天皇の英邁なることは申すまでもないことですが、昔から吾々人民は太陽即ち皇室の御祖先と考へて來て居る其考で萬世の御代々々の皇室に仕へまつて來た。列聖の大御心で何時も國民と子の如く惠まれ、神様として仁慈を御下しになつて來たといふことが結び付いて、或場合に於て國難があれば是と結び付いて國難を排除して行くといふことでありますから、此明治維新のやうな非常

にむづかしい難局が出来て来た時に於て、やはり維新の元勳を初めとして或は佐幕黨もありまして、色色喧嘩をしましたが、今日から見れば恩讐二つながら立派なことで、兎に角皆日本の國の爲に争ひをしたのであります。其間に自ら道が出来て明治維新の大業が出来たのであつて、是は明治天皇の大鴻業であります。やはり上下心を一にして明治天皇に仕へ奉つたので其上下一致が巧く出来る、さうして日本の歴史から出来て来たことでありまして、其考で以て皇室に對する考、國家に對する考を上も下も皆有つて居るのでありますから、斯ういふ大業が出来上つたこと、思ひます。是は洵に明治天皇は偉大な御方でありますから、さういふ御方が御出になつたといふことは洵に日本の幸福であつたのであります。

そこで明治天皇の御鴻業といふものを申上ますれば實に數限りもないことでありますが、此明治天皇の憲法御制定といふことが明治二十二年、それからして所謂教育勅語發布といふことが明治二十三年であります。此二つのことに就て申上げて見ますれば、此憲法發布式の時の詔勅並に御告文といふものを御覽になりましたこと、思ひますが茲に祖宗の遺訓に依て朕が祖宗より受けたる大權を以て我日本帝國の將來の慶福の爲に千古の大典を發布するのであるといふことを返す、御述べになつて居る。此新日本の發展と共に此憲法を布くことが國民の將來の爲に幸福である。朕が忠良なる臣民は我祖宗の親愛して来た臣民の子孫であるといふことを思うて朕は祖宗より受けたる祖宗の遺訓國史の成跡といふことを勅語では御述べになつて居ります、是は如何なるものでも同じことでもあります。教育勅

語に於ても斯の道は實に我皇祖皇宗の遺訓である、又爾祖先の遺風を顯影するに足らんといふことになつて居りまして、此憲法といひ教育勅語といひ、此後背には何れも日本の歴史といふものが必ず含まれて居る、歴史が明かに含まれて居るといふことで、西洋の憲法をも參酌して拵へましたらうし、色々さういふことでありましたらうが、西洋の憲法を基礎として拵へた譯でもなければ明治天皇が自分の御考で以て憲法を發布しようといふことで御制定になつたといふ譯ではない。詰り祖宗の遺訓を御述べになつたのであります。是まで不文憲法であつたものが初めて成文憲法に御作りになつたのである。それを神靈に御告げになつて人民に發布されたのが明治二十三年であつたのであります。其翌年に憲法を發布して國政の大典を御示しになつて、其年に教育勅語を發布遊ばしたのである。是まで不文のものであつたものを成文のものとして、是までは道德修身の教へが決して居らなかつたのを其道に依つて御定めになつたといふことで、此二つの憲法發布といひ教育勅語煥發といひ、是は實に日本の國の將來の方針を御定めになつたといふことで、明治二十二年、三年といふものは即ち明治天皇の御在世の真中でありま

す。其初めは殆ど種々東西な西洋の學術を得る、西洋の知識を得る準備をなさつた時代であります、日本の國の文明が外國の文明に依て發達しつゝあつたのであります、段々色々過激な論が出て参りました、今日も大分過激思想といふことがあります、其時も自由民權論などがあつて危ない時期を通過して來たのであります、其處に吾々の祖先の歴史といふもの、堅い力があります。彼の奈良朝時代には

弓削道鏡が天位を覬覦した時にも一種の國民の聲が和氣清磨の聲として現れて來たので、如何に自由民權の聲がありましても歴代の大御心に對する感謝の念は國民の胸の中に收まつて居りますから、容易に抜くべからざるものが其處にある。此歴代の沁渡しみわたつた考から結局明治の初めの維新の危険思想も通過して來て、其危険思想が政治の上にも教育の上にもあつた時に丁度明治の真中の二十二年、三年といふ時に於て初めて之を確定あらせられたといふことは、他の事は措いて内治の上に於て大切なことで感謝しなければならぬと私は思ふのであります。それがやはり決して明治天皇御一身の御鴻業といふことを申すよりも語り神代からの遺訓と始終仰せられたる祖宗の遺訓に依て其事が定まつた、其御鴻業が成らせられた、明治天皇は結り其御心持である。であるから吾々憲法なり此勅語なりに對しては決して是は一時的のものではない、明治天皇が御定めになつたといふは、明治天皇は實際其場合に御定めになつたのであります、其訓なり大御詔、大御葉言といふものは祖宗以來即ち天照御大神以來の不文の憲法が成文となつて現れたと斯ういふ風に考へなければならぬ。此祖先以來の大御心が大に明かに現れて明治天皇の御代に於て御定めになつたので、明治天皇は御自身に其御徳を具へさせられた御方であつて、此大御心が即ち永久日本國をしてやはり萬世一系の國たらしむる所以であつて、此大御心に感謝の念が吾々の心の中に潜んで居るのが忠君愛國の心となつて現れて居ると思ふのであります。

明治天皇の盛徳鴻業を外國人などが聞いて、唯だ偉い天子様だと 明治天皇が御崩れになつた時にも



西洋の新聞などで頻りに書いて頻りに盛徳を稱へて偉い立派な御方だと書いて居つたが、是が日本の歴史から斯ういふ偉い天子様が御出になつたといふことを書いた者はない。それは明治天皇は御偉い方でありませんが、歴史の結晶であるといふことを吾々は始終考へなければならぬのであります。チャンパーンといふ人がありまして、英吉利人でありませんが、日本に長く居りまして日本の文學を研究し日本語も能く出來た人で、大學の國語の先生までした人でありませんが、是は三十年も四十年も居つて日本に就ては能く知つて居るべき筈であります。それにも拘らず向ふに歸つてから、近頃日本では天皇崇拜といふことを始めた、教育勅語などで道徳の標準を決めて天皇を一番大切にする、天皇崇拜といふものを拵へて恰も尊王心を鼓吹することが現代の教育の方針である如く、新しくさういふことを工夫してやつたのである、昔の徳川時代あたりにはそんな考は無かつたのであるが少し遡つて見れば承久の亂に後鳥羽、土御門、順徳の三上皇を鳥流しにしたやうな人民である、それが近頃になつて尊王々々と云つて居るとして日本の教育のことを嘲つて居たことがありましたのであります。併し其等は日本の本當の歴史を知らない上面を見たことである。それだけ長く日本に居つて日本の文學を研究した人でも西洋人ではさういふことは分らぬ、日本ではそれ程學問した人でなくても大御心は知つて居る。歴史を見ればすぐ分ることであるが、それは三上皇を流したといふのは、南北朝などいふことは洵に畏多いことではありますが、權臣が間に這入つて權を恣にしたのである。人民一般と皇室とは如何なる場合に於ても變りは

ない。皇室は仁慈の政を行はせられ、人民の方に於ても天子様の大御心は分つて居りますから、其潜んだ勢力は國難に遭つて現れて来る。潜んだ勢力を西洋人などは知らないのである。幕府時代に於ては直接に天子様に忠を尽す者は無かつたか知らぬが、其精神はあつたのでありますから、子供が雛祭をする時でも天子様の人形を飾るといふこともあるし、今日年々宮中から歌を召されると何萬首といふ歌が集つて来るといふこともあるし、此事柄が皆此自らなる忠愛の念を證據立て、居るのである。却て近頃新しい教育を受け西洋の歴史を學び西洋の學術を研究する者などに教育を受けない者よりも此事を知らぬ者がある。けれどもそれは要するに日本の歴史を知らず生なまなか中外國の歴史だけ知つて居る爲に却て疑ひを挾む者が起つて來たのであつて、日本の教育を受けた者は此大御心は承知して居ることゝ思ふのである。さういふ風でありましてチャンパーレンのいふ如く天皇宗、尊王宗といふことは今日ではそれが嘘であつたことを氣付いた、此頃西洋人の方の段々書いたものなどを見ると、其チャンパーレンの云つたことは皮相の見であつたことを了解しまして、なか／＼日本人の、天皇に對する皇室に對する尊敬の念といふものは決して外の國にはない、半として抜くべからざるものであるといふやうなことから、其處に神道の研究も段々始つて來るといふことになり、特別の國民であるといふ風に見られるやうになつて來て、チャンパーレン一派の論は却て皮相の見であつたやうに西洋人が解しつゝあるのに、日本人にして今日それは唯だ一時的のもの、天子様の大御心は萬世一系に傳つて居ることを考へずに、唯だ歴史

を別々に見て取るといふやうな考になつて來て居るやうな傾向が、却つて教育を受けた者などの中に於てあると思ふのであります。明治天皇の御一代の御事業は總て祖宗の御心を以て御やりになつて居る、吾々も亦祖先より承けた血で以て祖先が歴代の天皇に對し奉つたと同じ心持で如何なる場合にも努めて居るのであつて、天子様といふものは歴代一つのものご見て居る。今百二十何代の御代であります、それは一つのもの一貫したもので連續したものである、鎖のやうに繋がつて居るものであつて、其間に大御心には何時、如何なる場合にも變動がない、御仁慈の政には變動はない、斯ういふ風に吾々は見えて居るのであります、随分教育のある人でも斯ういふやうなことを忘れて居る人があるかと思ふので、大御心といふ題で簡單に申した譯であります。色々此話に就ては申上げたいこともありますが尙又後の方も御出になることでもありますから、甚だ詰らぬ御話でありましたが、私の精神だけを御酌取り下されば幸ひであります。



近江路にて

佐藤庸也

山かあらす竹生島ならぬ朝もやの

琵琶の湖面ほかして見ぬぬ

雨もよひきつかはしけの旅路なれど

比良のひた山朝日は照れり

樂々の庭の面涼し夏なから

松の木蔭に翠したゝる

旭光照波

柴田孫太郎

旭日影さしそふ田子の浦波に

静けき御代をうつす富士の峯

